修士論文（要旨）
2017 年 1 月

ソーシャルサポートと死に対する態度の媒介要因の検討
―有料老人ホーム入居者の自尊感情に焦点をあてて－

指導　長田　久雄 教授

老年研究科
老年学専攻
215 J 6003
小野　真由子

Master's Thesis(Abstract)
January 2017

Correlation Between Social Support and Perspectives on Death: Senior's Self-Esteem those who residing in Continuing Care Retirement Community

Mayuko Ono
215J6003
Master'sProgram in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor:Hisao Osada

目次

Ⅰ．緒言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1）研究の社会的背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2）先行研究―死に対する態度と関連要因・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
3）媒介要因としての自尊感情 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅱ．目的と意義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅲ．方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
1）調査対象者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2）調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
3）調査項目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
4）分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

Ⅳ．倫理的配慮 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

Ⅴ．結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
1）分析対象者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
2）各尺度の得点と信頼性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
3）変数間の相関関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
4）媒介分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
5）ソーシャルサポートおよび自尊感情と死に対する態度の分散分析・・・・・・・・・ 10

Ⅵ．考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
1）媒介分析におけるソーシャルサポート，自尊感情および死に対する態度の関連・・・ 11
2）分散分析におけるソーシャルサポート低群と
自尊感情，および死に対する態度の関連・・・・・・・・ 12

Ⅶ．結論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

Ⅷ．本研究の限界と課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

謝辞 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

文献

資料

Ⅰ．諸言

日本は現在，高齢化率 25.0%を超える超高齢社会である．[1]高齢者の増加とともにやがて 2040 年には死亡者数が約 166 万人とそのピークを迎える．[2]今後最期の場所の確保と同時に，“自らの死と向き合う”という意識が求められ，より多くの高齢者，その家族そして社会全体が死と向き合わざるを得ない社会に直面する．死亡場所の推移について人口動態統計(2014)[3] によると，老人介護保健施設および老人ホームなどの施設の割合は介護保険のスタートした 2000 年に比べ約 4.4 倍に増加しており今後施設で亡くなる高齢者の増加が見込まれる．さらに医療技術の進歩により，延命治療，緩和医療など死の迎え方が多様化するなかで厚生労働省は「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」[4]を公表するなど，死に対する考え方への理解の必要性がうかがえる．このような背景を踏まえ，高齢者の死および生を周囲がいかにサポートしていくべきなのかを検討するため死に対する態度を理解することは非常に重要である．

死に対する態度についての先行研究には，心理的な概念 [5][6]や，自己にまつわる概念 [7][8] との関連が示されている．さらに高齢者の重要なサポート源である他者と死に対する態度の検討については，配偶者や子ども，孫 [9]，重要他者の死 [10]などと関連が報告されていた．さらにソーシャルサポートが死の受容に関連していることも示されていた [11]．この他にもソーシャルサポートは自尊感情 [12]など精神的健康にまつわる因子と有意な関連があることを明らかにされている．これらの先行研究からソーシャルサポートと死に対する態度には共通した関連因子が存在しており，それらが両者を媒介する可能性が考えられた．他者との関係性の視点から近藤 [13]は自己の死は今をともに生きる生そのものを考えることとしている．これを踏まえると死への態度は今を生きる態度に重なることから，関連要因の中でも生の主体である自己への態度を表す自尊感情 [14] が両者を媒介している可能性が高いと予測できた．

Ⅱ．研究の目的と意義

本研究は，高齢者のソーシャルサポートが自尊感情を介し死に対する態度に関連しているかどうか仮説的モデルを構築し明らかにすることを目的とし，死に対する態度に必要なケアの検討，実践に役立てていくことを意義としている．

Ⅲ．方法

1)対象者

対象者は神奈川県有料老人ホーム A に入居している 65 歳以上の高齢者とした．ただ，調査内容から対象者への心身の負担が大きいことを考慮し選定基準設けそれを満たした入居者男女 265 名を対象とした．

2)調査方法

自記式質問紙調査とし，回収方法は留置法とした．なお回収は専用 BOX を作成し設置した．調査票配布と回収時期は平成 28 年 9 月～10 月である．

3)調査項目

基本属性は，性別，年齢，家族構成（配偶者，子ども，孫，きょうだい），経済のゆとり，信仰する宗教，健康感，命にかかわる病気やけがの有無，重要他者との死別体験とした．使用尺度は Multidimensional Scale of Perceived Social Support 日本語版 [15] の短縮版(ソーシャルサポート測定)，Rosenberg.M の自尊感情尺度の日本語版 [16](自尊感情測定)，中高年に適応可能な死に対する態度尺度 [17] (死に対する態度測定)とした．なおこの尺度は「死に対する恐怖」，「死後の生活の存在への信念」「生を全うさせる意思」「人生に対して死が持つ意味」「身体と精神の死」の下位概念から構成されている．

4)分析方法

記述統計，相関分析，重回帰分析を行った.統計解析ソフトは SPSS Ver.23(IBM.,日本)を使用した．

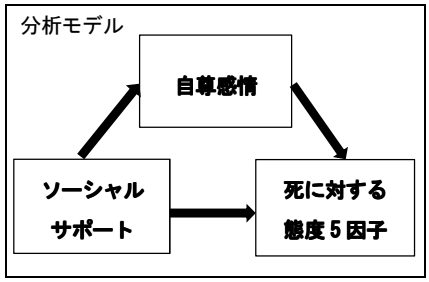
Ⅳ．倫理的配慮　本研究は桜美林大学研究倫理委員会にて承認されている．（承認番号 15054）．

V．結果

1）分析対象者

選定基準を満たした 265 名に調査票を配布し 82 名回収した（回収率約 30.9%）．そのうち欠損のあるものは除外し 54 名を最終的な分析対象者とした．

2）媒介分析



本研究は，自尊感情を媒介要因として媒介分析 [18)19)]の過程に準じ，重回帰分析と間接効果の算定及び検定 [20)]を行った．なお調整変数として 3）で示した調査項目をすべて投入した．第 1 に独立変数をソーシャルサポート, 従属変数を死に対する態度 5 因子それぞれとして重回帰分析を行ったところ「生を全うさせる意思」（β= .314，p＜ .05）および「人生に対して死が持つ意味」（β= .390，p＜ .01）のみに有意なパスが得られた．第 2 に独立変数をソーシャルサポート，従属変数を自尊感情として重回帰分析を行ったところ, こちらも有意なパスが得られた (β= .333, p＜ .05)．第 3 に，独立変数をソーシャルサポート※1，および自尊感情※2 とし，第 1 の分析で有意なパスが得られた「人生に対して死が持つ意味」を従属変数として重回帰分析を行ったところそれぞれに有意なパスが得られた．（β= .269，P＜ .05）※1（β＝ .363，p＜ .01）※2 なお従属変数を「生を全うさせる意思」とした分析には有意なパスは得られなかった（β= .304，n.s.）※1（β= .029，n.s.）※2 ためこれ以降の分析からは除外．第 4 にこれまでの分析ですべて有意なパスが確認できた「人生に対して死が持つ意味」を従属変数にしたモデルにおいてのみ自尊感情の間接効果を算出したところ，.121 であった．さらにその効果を検定した結果 Z=2.286（p< .05）であった．このことから間接効果は 5%水準で有意であることが確認できた．以上のことからソーシャルサポートと死に対する態度（人生に対して死が持つ意味）の間を自尊感情が媒介していることが明らかとなった．また自尊感情の媒介はなかったものソーシャルサポートはと「生を全うさせる意思」にも関連があった．

Ⅵ．考察

・ソーシャルサポートと「生を全うさせる意思」の関連

ソーシャルサポートの関連要因として自殺 [21)]や抑うつ [22)]に関連していることなど精神的健康が関係していることから生を生き切ろうとする意思の強さにはソーシャルサポートのような他者のかかわりが精神的健康を促し、「生を全うさせる意思」を高める傾向にあると考えられる．

・ソーシャルサポートと「人生に対して死が持つ意味」の関連

他者と死という視点で近藤 [13)]は「死の問題や死の意味はこれまで生きてきた人生や家族をはじめとする多くの人との関係性（＝固有性）においてこそそのあり様が浮き彫りとなる」としている．ソーシャルサポートによって築かれた互いの良い関係性が死の肯定的な側面に影響したと考えられる．

・ソーシャルサポートと自尊感情の関連

Cobb [23)]はソーシャルサポートとは愛され，尊重され相互義務のネットワークの一員であると信じさせてくれる情報であると定義している．また浅川 [24)]は社会関係における基本的次元に情緒的一体感があるとしている.それらを踏まえるとソーシャルサポートによってもたらされた他者に好意的に受け入れられる感覚が自己の価値を高めることに作用したと考えられる．

・自尊感情と「人生に対して死が持つ意味」の関連

まずこの尺度における死の意味を考えた．

原著者ら [17)]は「人生に対して死が持つ意味」を「生との関連で死を意味づけて受け入れる」としている．しかし筆者はこれに加えその尺度内容から死そのものが生へ価値をもたらすものであるととらえた.言い換えるなら死の価値ともいえる．生と死はつながっている [13)]ことを踏まえると生きる主体である自己への価値の高さが死の価値に反映されたと考えられる．

文献

1)内閣府:高齢者社会白書（概要版）第一節高齢化の状況.
（http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/gaiyou/s1_1.html　2017.1.10 アクセス）(2015).

2) 内閣府:H28 年度版高齢社会白書全体版. http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/s1_1_1.html
（2017.1.18 アクセス）(2016).

3)厚生労働省:人口動態統計.(http://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_1_2.html　2017.1.10 アクセス）(2014).

4)厚生労働省:人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン.
（http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000078981.pdf　2017.1.10 アクセス)(2007)

5)Tomer A,Eliason G. Beliefs about self, life, and death:Testing aspects of a comprehensive model of death anxiety And death attitudes.Death attitudes and the older adult: Theories, concepts and applications, Ed by A Tomer. 137－153,Brunner-Routledge, New York (2000).

6) 隈部知更：日本人の死生観に関する心理学的基礎研究;死への態度に影響を及ぼす４要因についての分析,健康心理学研究,19(1):10－24(2006).

7) 岡本祐子:高齢者の死の受容と自我同一性に関する研究.広島中央女子短期大学紀要,27:5－12(1990).

8) Miller H R, Davis S F, & Hayes K M.:Examining relations between interpersonal flexibility, self-esteem, and death anxiety. Bulletin of the Psychonomic Society 31 (5):449－50(1993).

9) 河合千恵子,下仲順子,中里克治:老年期における死に対する態度.老年社会科学,17(2):107－116 (1996).

10) 富松梨花子,稲谷ふみ枝:死生観の世代間研究.久留米大学心理学研究:久留米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要,11:45-54(2012).

11) 下仲順子,河合千恵子,中里克治ほか:老年期の心理社会的発達,日本心理学会第 56 回大会発表論文集：54(1992).

12) 福岡欣治,橋本宰:高齢者の過去および現在のソーシャル・サポートと主観的幸福感の関係.福岡文化芸術大学研究紀要,5: 55－60(2004).

13) 近藤恵:関係発達論から捉える死.211－213,風間書房,東京(2010).

14) RosenbergM:society and self image . 30－31, Princeton University Press, Princeton ,(1965).

15) 岩佐一,鈴木隆雄,権藤恭之ほか:日本語版「ソーシャルサポート尺度」信頼性および妥当性;中高年を対象とした検討.厚生の指標,54(6):26－33(2007).

16) 山本真理子,松井豊,山成由紀子:認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30(1):64－68(1982).

17) 丹下智香子,西田裕紀子,富田真紀子ほか:中高年者の適応可能な死に対する態度尺度(ATDS-A)の構成および信頼性・妥当性の検討.日本老年医学雑誌,50(1):88－95(2013).

18) Baron, R. M. & Kenny, D. A. The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. Journal of Personality and Social Psychology, 51, 1173－1182(1986).

19) 村山航:媒介分析・マルチレベル分析(http://koumurayama.com/koujapanese/mediation.pdf　2017,1.10 アクセス)(2009).

20)Sobel,M.E:Asymptotic confidence intervals for indirect effects in structural equation models. Sociological Methodology, 13, 290－312 (1982) .

21) Awata S, Seki T, Koizumi Y, et al.:Factors associated with suicidal ideation in an elderly urban Japanese population;a community-based, cross-sectional study.Psychiatry and Clinical Neurosciences,59:327－336 (2005).

22)小泉弥生,粟田主一,関　徹,中谷直樹ほか:都市在住の高齢者におけるソーシャルサ　ポートと抑うつ症状の関連性.日老医誌 ,41: 426－433(2004).

23)Cobb, S: Social support as a moderator of life stress. Psychosomatic Medicine, 38, 300-314(1976).

24)浅川達人:高齢期の人間関係.　（古谷野亘,安藤孝敏編)新社会老年学,第2版,107－139,ワールドプランニング,東京(2003).